北海道医報
ISSN 0913-0217　2008.10.1. 第1081号
発行人　北海道医師会長　長瀬　清
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 250円

季風

医師くのNarrative Medicine

情報広報部副部長　藤井美穂

世界が注目していた北京五輪開催は、カシュガル市、雲南省、そして北京市中心部で起きていた暴動は厳しい報道規制の陰に埋もれたというが、表向きには華麗な祭典として幕を閉じた。急成長の経済力を背景に建築された豪華なオリンピック会場、オリンピック前に見ていた北京市内の交通ラッシュと汚れた空気が一変した整備された緑の多い街並、街を歩く市民の豊かさなどに驚くとともに、競技でも印象に残ったシーンがいくつかあった。

心身ともに強い女子選手たちの戦いぶり、特に南アフリカのナタリー・デュトワ選手の強さは印象的だった。パラリンピックに出場した5種目すべてでアテネから2大会連続金メダルに輝くとともに、オリンピックの10㎞マラソン水泳で16位という記録を残した。17歳の時に交通事故でなくした左ひざから下のバランスをとって泳ぐのに費やした努力と技は計り知れない。補完された上半身の筋肉を見ると、17歳だった思春期後期の少女の気持ちが想像され痛い。同時に目標をもった生き方の強さが伝わってきた。

もうひとつがコーチの存在だった。北島康介選手は中学2年時から平井伯昌コーチのもとで指導された。理論的に泳ぎを分析し指導する姿の陰に、もう一つの成長を見守り続けてくれる存在があったという。生徒が精神的に不安定などんな時にも、信頼し人間性を鍛えあげてきた12年間が北島選手を作りあげた大きな要因であろう。

私は日本医師会の男女共同参画委員会に参加するようになって通算5年目になる。来年7月には当委員会主催の「第5回男女共同参画フォーラム」が札幌で開催予定だが、第1回が東京で開催されてから大阪、横浜、福岡と会を重ねるごとにフォーラムで協議される内容が少しずつ変わってきた。女性医師問題のみならず男性医師も含めて、医師全体のワークライフバランスがどうあるべきかという主題に移ってきている。それとともに男性医師のフォーラムへの参加が増え、第4回の福岡開催では過半数を占めた。

最近、女性医師問題といえば、医師不足を補う資源として女性医師を捉え、現場に復帰してもらうノウハウばかりが議論されている傾向があると感じる。医師不足だから医学部定員を1.5倍に増員、という厚労省の方針は間違ってはいない。しかし医学部教育体制の充実に対しての補填は計られていない。現状での増員は教育の質低下につながると考える現場では、簡単に数だけ増やす訳にはいかないと考えているだろう。

育児は次世代の教育である。保育室があれば育児しながら仕事を続けられる、とは女性医師の多くは考えていないだろう。かけがえのないわが子を育てる喜び、教育する重さと不安、一方ではキャリアを保ち続けたい、勉強したい、などさまざまな思いと葛藤し、結論をだして生き方を選択している。

私自身、とりあえず今春子どもを社会人として送り出した後、80代の両親の介護をどうしようかという問題が妹と交わされる話題のほとんどである。2人とも医師という仕事をもちながら、可能な介護は何だろう、老人介護施設に入所すれば解決とはいかない。質は？　母が入所したら父はどうなるか？　親の尊厳、私の娘を20年間にわたって育てあげてくれた年月、交錯する思いは複雑だ。

日本医師会の女性医師バンクにおける高い再就業率はコーディネーターの存在が機能している結果といわれる。単に情報提示のみでなく、葛藤する思いを先輩医師に相談しながら自身の結論を出すピアカウンセリングの要素がバンクにあるための成績といえるのではないか。

勤務医師の疲弊と現場からの立ち去りも同様である。多様な医師の生き方に対応するシステム整備と同時に、根底にある問題点に耳を傾け解決をはかる、まさにナレーティブ・メディスンの実践が医師自身の生き方を模索する上で求められていると感じる。